

【主催】邦楽実演家団体連絡会議

出演団体

(一社)義太夫協会 / 清元協会 / (二財)古曲会 / 新内協会
常磐津協会 / (一社)長唄協会 / (公社)日本小唄連盟
(公社)日本三曲協会 / 日本琵琶楽協会
東京都・(公財)東京都歴史文化財団

【助成】

東京都・(公財)東京都歴史文化財団

【後援】

公益財団法人 日本伝統文化振興財団

平成31年3月30日〔土〕

国立劇場小劇場

第四十九回

邦楽演奏会

- ◆ 新内節
- ◆ 一中節
- ◆ 琵琶
- ◆ 常磐津節
- ◆ 三曲
- ◆ 長唄
- ◆ 義太夫節
- ◆ 清元節
- ◆ 小唄

完全入れ替え制・全席自由

第一部 ● 開場10時30分 / 開演10時45分

第一部は子供向けのプログラムです。

「親子で楽しむ邦楽演奏会」として開催いたします。

第二部 ● 開場13時 / 開演13時30分

第三部 ● 開場16時30分 / 開演17時

TOKYO 2020

文化
オリンピックアード



ご挨拶

邦楽実演家団体連絡会議 議長 川瀬 順輔

本日は二〇一九都民芸術フェスティバル参加公演「第四十九回邦楽演奏会」にお越しいただきまして誠に有難うございます。

本演奏会は昭和四十六年から継続して開催し、今回で第四十九回を数えます。多くのジャンルの邦楽を一度に鑑賞できる演奏会としてご評価いただき、毎回お越しいただくお客様も数多くおられ、主催者として深く感謝いたしております。

さて、東京オリンピック・パラリンピックの開催もあと一年四か月後に迫ってまいりました。スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもありまして、伝統芸能に携わる私達も開催機運を盛り上げるべく本演奏会を応援文化プログラムの一つとして開催いたします。大会をきっかけとして一人でも多くの方が邦楽に関心を持っていただけたらと願っております。

今回の演奏会では第一部を子供向けのプログラムとし、昨年の尺八に続いて今年はいは三味線を取り上げて解説するなど将来の邦楽ファン作りをめざしております。

第二部、第三部では、春を喜ぶをイメージした演目を中心としたプログラムいたしました。年々桜の開花も早まってきておりまして、開催日の今日はまさに春の到来を皆様で喜ぶタイミングとしてふさわしいと考えた次第であります。芸達者な出演者の実演をお聞きいただきたいと存じますが、ナビゲーターを皆様ご存知の葛西聖司さんをお願いしております。幕間の軽快なお話もお楽しみいただきたいと存じます。

ご来場の皆様には十分にお楽しみいただける様に主催者一同注力してまいります。不行き届きの点につきましては何卒お許しいただきまして、どうか最後までごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

ご挨拶



東京都知事
小池 百合子

「都民芸術フェスティバル」は、広く都民の皆様にご覧いただける舞台芸術に親しんでいただく機会を提供し、東京における芸術文化活動の振興を図るため、毎年一月から三月にかけて開催しております。

東京の春を彩る舞台芸術の祭典として、今回で第五十一回目を迎えます。都内各地の会場において、音楽、演劇、伝統芸能、舞踊など、幅広い分野の多彩な演目が上演されます。

是非、多くの皆様にご覧いただき、素晴らしい芸術文化に深く触れていただきたいと思っております。

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会まで、残すところ一年あまりとなりました。

東京都では、東京二〇二〇大会に向けた気運醸成を図るため、様々な文化プログラムを「Tokyo Tokyo Festival」として展開し、文化芸術都市東京の魅力を伝える取組を行ってまいります。そして、この取組を通じて大会成功と二〇二〇年以降を見据えた文化的なレガシーの創出も目指してまいります。

結びになりますが、本フェスティバルに御参加いただく皆様の御尽力に感謝いたしますとともに、公演の御成功と今後益々の御発展を祈念いたします。

二〇一九都民芸術フェスティバル開催によせて



公益財団法人東京都歴史文化財団 理事長
日枝 久

東京で活動する芸術文化団体を支援し、都民の皆様にご覧いただける舞台芸術や伝統芸能に親しんでいただくため、「都民芸術フェスティバル」は昭和四十三年度に始まり、今回で五十一回目を迎えます。

東京都歴史文化財団は、都立文化施設の管理運営や各種文化事業の実施を通して、東京の芸術文化の振興、歴史および文化の継承とその発展に向けて取り組んでおり、平成二十年度から本フェスティバルの運営に加わっております。

オーケストラ、室内楽、オペラ、現代演劇、バレエ、現代舞踊、邦楽、日本舞踊、能楽、寄席芸能、民俗芸能の十一分野の多彩な芸術や芸能が集う本フェスティバルにお越しいただき、今日の東京を形づくる豊かな芸術文化を発見し、ご堪能いただければ幸いです。

ご来場の皆様をはじめ、ご参加の皆様および関係者の皆様にご心より感謝いたしますとともに、舞台を通じた様々な出会いが、地域社会に潤いをもたらす、また、次世代に豊かな芸術文化を継承するものとなりますよう祈念いたします。

第49回 邦楽演奏会



第二部

13時30分開演

一中節 花の段

4

琵琶 曲垣平九郎

6

常磐津節 鞞

9

三曲 おちや乳人

12

長唄 四季の山姥

14

義太夫節 義経千本桜 河連法眼館の段

16

一中節 花の段

浄瑠璃 都一せつ

都一まり

都一延

三味線 都一のぶ

都一志朗



都一せつ（みやこいちせつ）
一中節浄瑠璃方。重要無形文化財一中節保持者（総合指定）に認定。古曲会顧問。昭和35年十一世都一中に入門。昭和36年都一せつの名を許される。古曲演奏会、邦楽鑑賞会等に出演。



都一のぶ（みやこいちのぶ）
一中節三味線方。重要無形文化財一中節保持者（総合指定）に認定。昭和43年十一世都一中に入門。昭和44年都一のぶの名を許される。古曲演奏会、邦楽鑑賞会等に出演。



解説

花の段

この曲は谷崎潤一郎作小説「細雪」の中から作者自身が歌詞を作ったもので、これを親交のある二世都一廣に作曲を依頼したもので、発表は昭和二十八年新橋演舞場にて京舞の会が催された時であります。その後放送芸術祭にラジオ東京から参加放送され、文部大臣賞を獲得した作品です。内容は「細雪」の中の三人姉妹が京都の平安神宮で花見がてら庭の池の鯉に麩を投げて与える様子を歌ったものです。



詞章

本調子、へ祇園清水嵯峨嵐山、
合、御室などと申せども、合、都の花は平安神宮、
合、大極殿の紅枝垂よの。
本調子、へ今年の花見に参つたれば、実に咲いたりやな糸さくら。合、そよ吹く風に一ひら二ひら、ひらりひらりひらりひらり、空に知られぬ細雪、彼の三人の姉妹と、妍を競ひて候よ。
へ彼の三人の姉妹が、池の中なる欄に、合、六つの袂を打掛け、ぱっと麩をなげて候へば、
へあれよあれよ緋鯉真鯉ども、今年も群れて参つたり。実に糸さくらいとせめて、花見衣に花弁を、秘めておかまし春の名残りにと、姉の幸子が詠みて候。



琵琶

曲垣平九郎

琵琶

都穂鳳



都穂鳳（みやこすいほう）
錦琵琶・都派の家元、都錦穂の長女として東京に生まれる。幼時より母、錦穂の指導を受け、錦琵琶を修得する。東京都小学校教諭として奉職し、琵琶演奏を音楽、歴史教育の授業に取り入れ、伝統邦楽の普及に努めた。平成十八年、日本琵琶楽協会の常任理事に就任する。全国各地での演奏活動のほか、錦琵琶の作曲活動も行い、代表曲に「檢校・杉山和」がある。現在、錦琵琶・錦穂会家元、会長として一門の指導にあたりている。



解説

まがきへいくろう
曲垣平九郎

田中濤外 作詞

水藤錦穰 作曲

時は寛永の頃、三代將軍家光は、増上寺參詣の帰り道、愛宕神社前を通りかかります。見上げる山上に咲く、桜の花の美しさに、家光は「あの桜の一枝を取って参れ。」と、命じます。しかし、神社男坂の急階段に恐れをなし、誰も返事をしません。苛立ち、せかせる家光の命令に、馬術の名人達が次々と階段を上ろうとしますが、階段半ばで、馬もろとも転げ落ちてしまいます。そこへ、陪臣の身ながらと、曲垣平九郎盛澄が名乗りでます。彼は、秘術を尽くし、巧みに馬を操って、急階段を上りきり、見事に桜の枝を取って、家光に捧げて、平伏します。

尚、講談の「寛永三馬術」が有名ですが、錦琵琶の創始者、水藤錦穰のために、田中濤外が琵琶歌として、新たに作りました。講談では、梅の木となっていますが、水藤錦穰流派の号が桜のため、梅を桜にしました。

「曲垣平九郎」は、昭和初期、水藤錦穰二十代の作曲で、錦琵琶の代表曲の一つです。

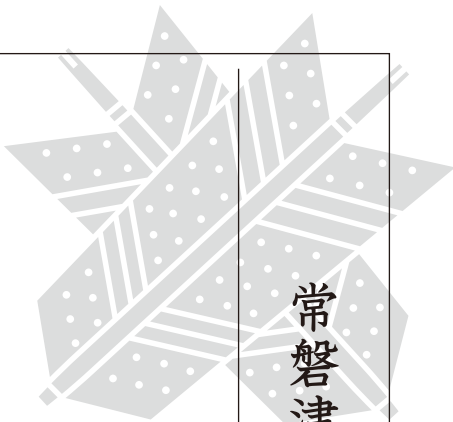


詞章

世は寛永の春風や 駒のたてがみそよがせて 鞭声いとも肅々と 三縁山のかえるさに 仰ぐ愛宕の山桜 ここに徳川家光は 年少気鋭の身を以て 三百諸侯を引き具なし 思わずここに駒止めて 暫し嘯く春霞 何思いいけん家光は 誰そある馬にて この石段を駆け登り かの枝取って 参れよと 仰せに並み居る諸大名 従ふ譜代の旗本も 互いに顔を見合いつつ 弓矢の道に死すならば かねて覚悟の事なれど かかる遊戯なる言の葉に 捨てむ命の惜しまれて とみに返辞もなさざりき 家光心苛立てて 如何に如何にと促せば 台命今は是非なしと 仕ふる主の面目に 我仕らんと立ち出づるは 伊勢藤堂の馬術指南 山本右京忠重なり 駒の手綱を引き締めて はいよ はいよ と 勇ましく 三十余段上りし時 馬は前足踏み外し 瞳とばかりに落ちにけり 続いて罷り出でたるは 秋田の佐竹に知られたる 鳥居喜一郎重房なり 之は如何にと見る中に 石段半ばに崩れ落つ この時馬前に駈けるは 三十余歳の武士一人 赤心面に現して 彦左が前に申すよう 某ことは 讃州の 生駒将監が家臣 曲垣平九郎盛澄なり

陪臣の身の恐れながら 仰せを果し候べし 上へ御取り計ひねがはむと 云ふを聞くより家光は よくぞ汝は申したり 武道に上下の隔なし 疾く仕れと仰せける はっと答えて平九郎 連銭葦毛の逞しき 駒に跨がり しずしずと 見上ぐるばかりの石段の 前に二三度輪を描き 馬人共に幾度か 見上げ見下ろす愛宕山 時分は良しと鞭を上げ はいどうどうの 掛け声に 馬の蹄のかつかつと 上へ上へと上り行く あれよあれよと見るうちに 石段半ば過ぎし時 馬上の姿見えざるは 之れぞ曲垣が秘術なる 霞隠れの一手なり 馬は歩みも乱さばこそ 次第次第に上り 詰め 櫻間近くなりければ 盛澄姿を現して 一枝 襟に差し挟み 立つや愛宕の山の上 鬢髪風に はらはらと袖に降りしく 花吹雪 家光はじめ一同は 固唾を呑んで 見入りしが この有り様に思わずも どっと揚げたる鬨の声 山も揺るがん許りなり





常磐津節

鞞うっぱ

浄瑠璃

常磐津 清若太夫

常磐津 若羽太夫

常磐津 松希太夫

三味線

常磐津 一寿郎

常磐津 美寿郎

岸澤 満佐志



常磐津 清若太夫（ときわづ きよわかたけう）

昭和二十一年生れ。三十二年四世松尾太夫に入門。四〇年師範として清若太夫の名を許される。歌舞伎公演、舞踊会、演奏会、放送などに出演の傍ら、平成四年より江戸川区内全三十三中学校に於て、邦楽鑑賞教室を実施。延べ二九七校、参加・体験生徒数は十三万人以上。常磐津協会理事・事務局長。江戸川邦楽邦舞の会代表。十二年重要無形文化財常磐津節（給合認定）保持者に認定。十五年江戸川区文化功績賞を受賞。二十八年旭日双光章を受賞。



常磐津 一寿郎（ときわづ いちじゅろう）

昭和二十二年生まれ。昭和四十三年常磐津菊路太夫に入門、常磐津菊寿郎にも師事。同年一路郎許名。昭和五十九年一寿郎と改名。平成元年清栄会奨励賞、平成十七年十二代富本豊前継承。常磐津協会理事、常磐津保存会理事。平成二十九年春 旭日双光章を受賞。

詞章

へ隣り村から今日此村の、葺屋町へと御聶厦の、風に廻され
真赤いな赤かんべ、初心は知れた初舞台、罷り出たらめ出放
題、酒のさの字の其暇に、見失ふたる猿丸の、迷子のく
太夫やい。迷子のくお猿やいと呼子鳥、紋もでっかり裏梅
が、梅の林を浮かれ来る。へオ、太夫、此処に居たか。サ爰
へ来いくと寄るを隔て、。

へすりゃ其猿の主は貴様か。コレく何と物は相談ぢやが、
その猿をどうぞ、譲っては呉れまいか。

へ減相な此の太夫殿を手放しましては、翌あすから商売がなりま
せぬ。

へなる程、尤もぢやが、アレ彼処に御座るお女中は、更科主
水経春様といふ、お大名の御代参、今度賄弓のりゆみの御遊に、大内
で用ゆる鞞に、猿の皮が入用ぢや程に、あなたに猿を売って
は呉れまいか。へイエ何ぼう大内の御遊でも、是ばかりは
御免下さりませくと。詫びるに、へ此方はつけ上り。へそ
んなら何うでも成らぬと言やるか、女と侮り上様の上意を聞

解説

鞞うっぱ

初演は天保九年十一月市村座の顔見世興業で、配役は猿曳
き・四代目中村歌右衛門、女大名・市川九蔵、奴橋平・十二
世市村羽左衛門、小猿・中村琴次郎、作詞・中村重助、出語り・
常磐津文字太夫、岸沢式佐です。

「うっぱ」とは弓矢の矢を入れる器の事。物語の舞台は京の
鳴滝八幡宮の社頭です。粗筋は 主人の代参で鳴滝八幡宮へ
来た女大名と奴が、探していた「うっぱ」に丁度良い小猿を
捕えます。本日の演奏はここからです。女大名は現れた飼主
の猿曳きに、譲って欲しいと頼みますが断られ、小猿を射殺
そうとします。驚いた猿曳きは泣く泣く承知をし、打ち殺そ
うとします。すると小猿は無心に教わった芸の舟を漕ぐ真似
をします。その哀れな様に胸を打たれた女大名は猿を助けま
す。猿曳きはお礼に小猿と共に踊って見せ、幕となります。

きやらねば仕様がある。

へ素袍投げかけ大名の、威を張り詰めし弓張の、矢先鋭く立ちかゝる。猿曳驚き飛びしさり。へア、もし待って下さりませ、く。成程斯うなるからは猿の皮を上げませうが射殺されては猿の皮に疵が付いて役に立ちますまい。ハテ何うか仕様かと、小首傾け點頭いて、へオ、よい事が御座ります。猿の一打と申して急所が御座ります程に、皮にも疵の付かぬやうに、打殺して上げませう。

へそんなら吃度打殺して、サ早う渡せ。

へハッ、へ畏まって御座ると立上り、又有るまじき御望みは、只今殿様殺せとある。成らぬと言へば俺ともに、只一矢にて射殺すと、引くに引かれぬ強弓の、仰せはかなき今日の仕儀、へコレましょ、へ小猿の時から飼ひ置いて、へ朝夕の煙さへ、そちが蔭にて楽々と、暮らせしものを情ない、へ畜生なれどもよう聞けよへせめて今度は人間に、生れ変わって来るやうに、教へこんだる一節に、へエ、さりとは、さりとは エイエ、又有るかいな。さんな又あるかいな。へ是非なくくも立ち上り、振り上げし鞭の下、廻る小猿のいぢらしさ。

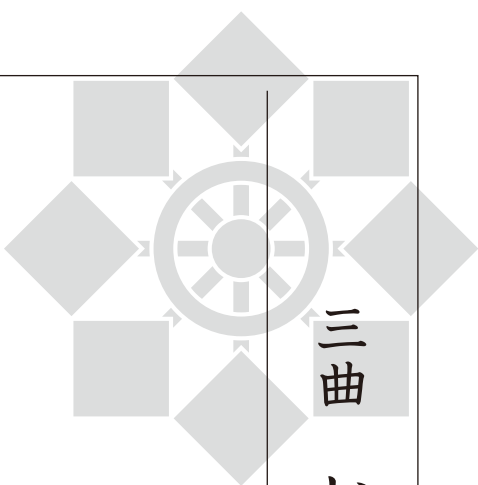
へアレく、今のを御覧なされしか。打殺さる、鞭とは知らず、船漕ぐ真似を仕まするわいの。船漕ぐ真似を仕まするわいの。へそんなら何といふ。殺さる、とは知らいで芸をするかや。へ畜生でさへ物を知るに、如何に主命なればとて、へもの、哀れもかへりみず、何うして夫が殺されう、命を助けた連れて帰りや。

へエ、夫は誠で御座りまするか。へおいのうへヤレく、嬉しやく お礼に猿を舞はせませう。天下泰平、御武運長久御祈祷に、猿が参って能仕まつる。

へ御知行も、まさる目出度、踊るが手元面白や。ハンヤコリヤくく、黄金の数々積揃へ、庭に黄金の花盛り、花実も栄ふ目出たさよ。

へ豊かの御代の一踊、へ一の幣立て、二の幣立て、三に黒駒信濃を通る。船頭どのこそゆうけんなれ、泊りくを眺めつ、。千秋や萬歳と、俵を重ねて面々に、楽しうなるこそ目出度けれ。

へさうに三人立ちかゝり、届かぬ梢の綱渡り、三筋の霞猿曳や、橘花董る花舞台、笑ひ興じて祝しける。



三曲 おちや乳人

箏 羽鳥藤令柯

五十嵐藤栄柯

日原藤花維柯

岩田柔柯

羽鳥省三

江夏藤綾柯

三絃 大原藤景柯



岩田 柔柯 (いわたじゅうか)

九州系地歌箏曲家、加藤柔子(初代芙蓉会会長)宅で生まれる。四歳より加藤柔子に箏の手ほどきを受け、以後厳格な教えを受ける。十二歳でNHKオーデイションに合格。師の没後は、母廣岡柔甫に師事。三絃を井上道子に師事する。一九八二年 藤井久仁江、富樫教子、瀧澤郁子と共に「音和会」を結成、第一回公演を開催(以後全十二回開催)。「藤井久仁江箏曲地歌の世界(CDアルバム五枚組、日本コロムビア)」に共演。一九九四年「音和会」同人と共にアメリカ各地を巡演(文化庁派遣)。一九九八年「岩田柔柯リサイタル」を開催。現在、九州系地歌箏曲演奏家として数多くのリサイタル、演奏会、FM放送等に出演のほか、後進の指導・育成に当たっている。公益社団法人日本三曲協会参与、生田流協会理事。四代目芙蓉会主宰。



解説

おちや乳人めのと

元禄時代の子守歌と狂言を元に作られた地歌。「おち」とは貴人の子供の養育全般を担う女性を指す「御乳（おち）の人」を表し、乳人（＝乳母、めのと）と同義語であり、曲名としては「おちや乳人」を訛って「おちや乳人」とも言う。気取ったところの無い、当時の一般人の言葉で身近な事柄や感情を歌ったもので、「七つになる子が・・・」以下の部分は狂言では「七つになる子」として語られています。

歌詞の中にある「いんのこ、いんのこ」とは犬の子のことで、当時は犬が物の怪を払うものと考えられており、泣く子をあやしたり、子供を寝かしつけたりするときに唱えた言葉です。また、神崎（大阪府摂津市）、北嵯峨（京都市北西）、吉野（奈良県吉野町）、初瀬（奈良県桜井市）などの地名が出てくるがいずれも近畿地方のものであり、上方で作られた地歌であることが分かります。

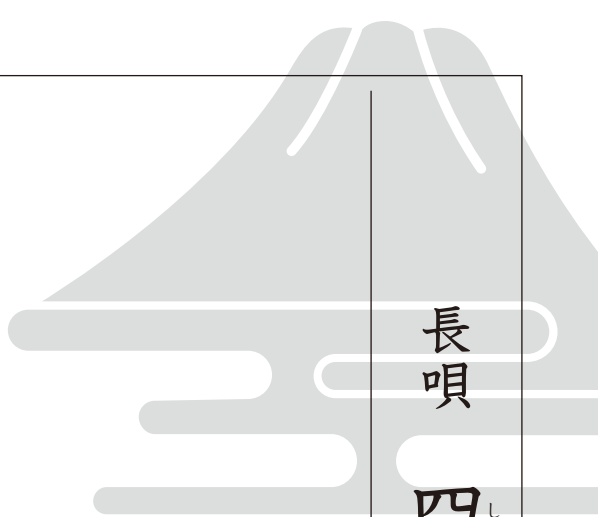


詞章

おちや乳人のくせとして、背に子を負ひ寝させておいて、狗の子、狗の子と言ふたもな、目りなかけそよの、花の踊はな、扱て花の踊はひと踊り。こ、な子は幾歳、七つになる子がいたいけな事言ふた、殿が欲しいと唄ふた。でも扱っても、我御寮は、誰人の子なれば、定家蔓か、離れがたやの、離れ難やの、川舟に乗せて、連れて行こやれ神崎へ神崎へ。

でも扱っても我御寮は、踊り子が見たいか、踊り子が見たくば北嵯峨へ御座れの。北嵯峨の踊りは、つづら烏帽子をしやんと着て、踊る振りが面白や。

吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、恋しき人が見たいものよ。ところどころ御参りやって、迅う下向めされ。咎をば乳母が、負い参らしよ



長唄 四季の山姥やまんば

唄 今藤 郁子

杵屋 秀子

今藤 政子

三味線 今藤 長十郎

今藤 長由利

杵屋 三澄



今藤 郁子（いまふじゆうこ）

長唄演奏家（唄方）。東京生まれ。三歳より祖母今藤綾子（人間国宝）に師事。十五歳NHKオーディション合格。初ラジオ放送。東京芸術大学邦楽科卒業。安宅賞受賞。NHK文化センター、よみうりカルチャースクール講師、学校法人東山女子学園助教授。

四世 今藤 長十郎（いまふじちようじゅうろう）

長唄演奏家（三味線方）。一九八四年 四世今藤長十郎襲名。家元継承。毎年、自身のリサイタル「三味線の響」を開催する他、海外では、米国、欧州各国、豪州、東南アジア各国にて今藤長十郎公演を開催。二〇一八年はニューヨークカーネギーホールで開催した。今年 はウィーン学友協会公演を予定。作曲面では、毎年恒例の春の京都宮川町「京おどり」や、日本舞踊協会委嘱作品をはじめとする舞踊曲も数多く手掛けている。（二〇〇九年文化庁長官表彰）現在一般社団法人長唄協会 副会長、国立劇場技能養成所講師、大阪芸術大学客員教授、学校法人東山女子学園教授、NHK文化センター講師。



解説

四季の山姥

文久二年（一八六二）三月七日、南部侯の不二御殿で開曲。「御屋舗番組控」に「御作」と肩書を付け、「新山姥」、その下に「開キ」とあります。

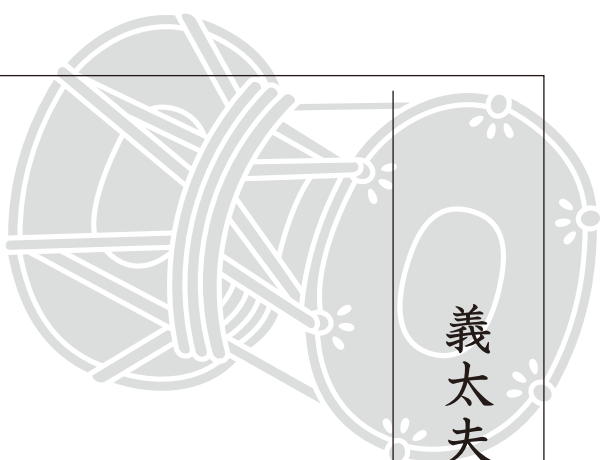
作曲は十一世杵屋六左衛門。作詞者については、南部家第二十六世利敬未亡人教子、第三十八世利濟、第三十九世利義（信侯）、教子と信侯の合作かとするものなどと説は多いですが確かではありません。二上りの「ふりさけ見れば…」は最初はなかった歌詞で、後から加えられたもの。六左衛門自身の手になったともいわれています。義太夫節を引用した「遠近のたつきも知らぬ」で始まり、春・夏と唄い進み、「何れの里に衣うつ」のあとに「虫の合方」がたっぷり入り、二上りとなって「浮絵に兄ゆる安房上総」と高輪・品川の海が唄われ、高三下りとなって山中の冬となり、鶯の笛鳴き、雪中にあざやかな梅の蕾の紅を唄い、あと「山めぐり」となります。大時代な立回りを聞かせる合方がある「谷の庵に晏然と…」で終曲となります。

「唄もの」。「遠近の、たつきも知らぬ」の唄い出しのあたり、また、「あら面白の山めぐり」の部分など「語りもの」の趣が色濃い曲です。



詞章

本調子へ遠近の たつきも知らぬ山住居 われも昔は流れの身狭き庵に見渡せば へ春は殊さら八重霞 その八重桐の勤めの身 へ柳桜をこきませて 都ぞ春の錦着て 手練手管に客を待つ へ夏は涼しの蚊帳の内 比翼のごぎに月の影 へ秋はさながら縁先に三味線弾いてしんき節 髪の毛の乱れを簪でかき上げながら畳算 眠る禿に無理ばかり ほんに辛いじゃないかいな へ同じ思いに鳴く虫の 松虫鈴虫響虫 馬追虫のやるせなく いずれの里に衣うつ へよくも合わせたものかいな 二上りへ振りさけみれば袖ヶ浦 沖に白帆や千鳥立つしじみ取るなる様さえも あれ遠浅に 漆標 松棒杭へ遁れ来て ませた鳥が世の中を あほうあほうと笑う声 立てたるしびに附く海苔を とりどり廻る海士小舟 浮絵に見ゆる安房上総 三下りへ冬は谷間に冬籠る まだ鶯の片言も 梅の荅の花やかに 雪をいたたく葛屋の軒端 あだな松風吹き落ちて ちりや ちりや ちりちり ちりちりぱっと 散るは胡蝶に似たる景色かな へあら面白の山めぐり へどっこいやらぬと取り手の若木 こなたは老木の力業 へ中よりふっと捻ぢ切る大木 かけりかけりて谷間の 谷の庵に晏然と 其儘そこに座を占めて 幾年月を送りけり



義太夫節

義経千本桜

河連法眼館の段

浄瑠璃 竹本駒之助
三味線 鶴澤津賀寿
ツレ 鶴澤寛也



鶴澤 津賀寿（つるざわつがじゆ）
（一社）義太夫協合理事。義太夫節保存会理事。平成二十一年重要無形文化財「義太夫節」（総合認定）保持者。平成八年芸術選奨文部大臣賞新人賞、九年（財）清栄会奨励賞受賞。十一年ビクター財団奨励賞受賞。三十年中島勝祐創作賞受賞。昭和五十九年竹本駒之助に入門、四代目野澤錦系に師事。



竹本 駒之助（たけもとこまのすけ）
（一社）義太夫協合理事。義太夫節保存会会長。平成十一年重要無形文化財「義太夫節」（個人認定）保持者。十五年紫綬褒章受章、二十年旭日小綬章受章。二十七年文化庁芸術祭音楽部門大賞受賞。二十九年文化功労者。昭和二十四年竹本春駒に入門。四十五年四世竹本越路大夫の門人。



解説

よしつねせんぼんざくら
義経千本桜

かわつらほうげんやかた
河連法眼館の段

義太夫節三大傑作の一つといわれる源平物の作品です。兄源頼朝に追われた義経が中心となる物語は、二代目竹田出雲らの合作。延享四年（一七四七）に大坂竹本座で初演され、後に歌舞伎にも移され、「河連法眼館の段」は「狐忠信」として人気の演目になりました。義経が後白河法皇から託された「初音の鼓」は、かつて雨乞いの為に千年を生きた雌狐雄狐の皮を使い仕立てられた物でした。義経が愛妾静御前に預けた鼓を親と慕って現れたのが、義経家臣の佐藤忠信に化けた源九郎の名を持つ狐だったのです。静御前の供をして、義経が匿われる河連法眼館へやって来た忠信は、本物の忠信が現れたことから義経らに偽物と見破られます。本日の演奏は、正体を見破られた狐が、これまでの苦難と親狐への思いを語るるところからです。その狐の姿に己を重ねた義経は、去ろうとする狐に親である鼓を与えるのでした。そして狐は義経の恩に応える為、その通力によって攻め来る敵方を封じるのでした。



詞章

「かほど業因深き身も、天道様の御恵みで、不思議にも初音の鼓、義経公の御手に入り、内裏を出づれば恐れもなし。ハア、嬉しや悦ばしやと、その日より付き添ふは義経公のお蔭。稲荷の森にて忠信があり会はずばとの御悔み、せめて御恩を送らんと、その忠信になり変り、静様の御難儀を救ひました。こ褒美とあつて、勿体なや畜生に、清和天皇の後胤源九郎義経といふ御姓名を給はりしは、そら恐ろしき身の冥加。これといふもわが親に孝行が尽くしたい、親大事、親大事と思ひ込んだ心が届き、大将の御名を下されしは人間の果を請けたも同然、いよ／＼親がなお大切、片時も離れず付き添ふ鼓。静様はまたわが君を、恋ひ慕ふ調への音、変はらぬ音色と聞こゆれども、この耳へは二親が、物言ふ声と聞こゆる故、呼び返されて幾度か、戻つた事もござりました。只今の鼓の音は、私故に忠信殿、君のご不審蒙つて、『暫くも忠臣を苦しますは汝が科、早や／＼帰れ』と父母が、教への詞に力なく、元の古巢へ帰ります。今までは大将の御目を掠めし段、お情

には静様、お詫びなされて下さりませ」

と、縁の下より伸び上り、わが親鼓に打ち向ひ、交はず詞の尻声も、涙ながらの暇乞ひ、人間よりは睦まじく。

「親父様母様、お詞を背きませず、私はも、ふお暇申します。とは言ひながら、お名残り惜しかるまいか、二親に別れた折は何にも知らず、一日々々経つにつけ、暫くもお傍にゐたい、産みの恩が送りたいと、思ひ暮らし泣き明し、焦れた月日は四百年。雨乞い故に殺されしと、思へば照る日がエ、恨めしく、曇らぬ雨はわが涙、願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴れし妻狐。中に設けしわが子狐、不憫さ余つて幾度か、引かる、心を胴窓に、荒野に捨て、出でながら、飢へはせぬか、凍へはせぬか、もし獵人に取りはせぬか、わが親を慕ふ程、わが子も丁度この様に、われを慕はふかと、案じ過ぎがせらる、は、切つても切れぬ輪廻の絆、愛着の鎖に繋ぎ止められて、肉も骨身も碎くる程、悲しい妻子を振り捨て、去年の春から付き添ふて、丸一年たつやた、ず。『去ね』とあるとてなんとマア、『アツ』と申して去なれませ、か、『アツ』と申して去なれませふかいの。お詞背かば不孝となり、尽くし

た心も水の泡、切なさが余つて、帰るこの身はなんたる業。まだせめてもの思ひ出に、大将の給はつたる源九郎をわが名にして、末世末代呼ばるゝとも、この悲しさはなんとせん。心を推量し給へ」

と、泣いっつ口説いっつ身もだへし、どうど伏して泣き叫ぶは、大和国の源九郎狐と言ひ伝へしも哀れなり。

静はさすが女氣の、かれが誠に目もうるみ、一間の方に打ち向ひ、

「わが君、それにましますか」

と、申す内より障子を開き、

「オ、委しく聞き届けし。さては人にてなかりしな。今までは義経も狐とは知らざりし。不憫の心」

とありければ、頭をうなだれ礼をなし、御大将を伏し拝み、座を立ち立ちながら、鼓の方を懐かしげに、見返り／＼行くとなく、消ゆるともなき春霞、人目朧に見へざれば、大将哀れと思し召し、「アレ呼び返せ鼓打て、音につれ又も帰らん、鼓、鼓」

とありければ。静は又も取り上げて、打てば不思議や音は出

でず、
「これはく」
と取り直し、打てどもく『コハいかに』、ちいともぼうとも音せぬは、

「ハア、さては魂残すこの鼓、親子の別れを悲しんで音を止めたよな。人ならぬ身もそれ程に、子故に物思ふか」
と、打ち萎るれば義経公、

「オ、われとても生類の、恩愛の節義身にせまる。一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ、日蔭鞍馬に成長、せめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み、忠勤仇なる御憎しみ、親とも思ふ兄親に見捨てられし義経が、名を譲つたる源九郎は前世の業、われも業。そもいつの世の宿酬にて、かゝる業因なりけるぞ」

と、身につまさるゝ御涙に、静は『わつ』と泣き出だせば、目にこそ見えね庭の面、わが身の上と大将の、御身の上を一口には勿体涙に源九郎、保ち兼ねたる大声に、『わつ』と叫べばわれとわが、姿を包む春霞、晴れて形を現はせり。
義経御座を立ち給ひ、手づから鼓取り上げて、

「ヤイ源九郎、静を預かり長々の介抱詞には述べ難し。禁裏より給はり大切の物なれども、これを汝に得さする」
と、差し出し給へば、

「ナニ、その鼓を下されんとや。ハアくくありがたや忝なや。焦れ慕ふた親鼓、御辞退申さず頂戴せん。重々深き御恩の御礼、今より君の影身に添ひ、御身の危きその時は一方を防ぎ奉らん。返へすくも嬉しやな。オ、それよそれ、身の上に取り紛れ申す事怠つたり。一山の悪僧ばら、今宵この館を夜討ちにせんと企てたり。押し寄せさするまでもなし、わが天変の通力にて、衆徒を残らず謀つて、この館へ引き入れく、真向立割車切、また一時にか、りし時、蜘蛛手がぐ縄十文字、あるひは右袈裟左袈裟、上を払へば沈んで受け、裾を払はばひらりと飛び、軽捷秘術は得たりや得たり、御手に入れて亡ぼすべし。必ずぬからせ給ふな」
と、鼓を取つて礼をなし、飛ぶが如くに行末の、後をくらまし失せにける。

第49回 邦楽演奏会



第三部

17時開演

三 曲

箏曲組歌 「初音曲」 (奥組) 21

清元節

梅の春 23

新内節

明烏夢泡雪——部屋 25

小 唄

花筏／花の雲／手枕や／めぐる日／
浮気鶯／止めては見たが／春霞浮世
春風がそよそよど 28

常磐津節

乗合船 32

長 唄

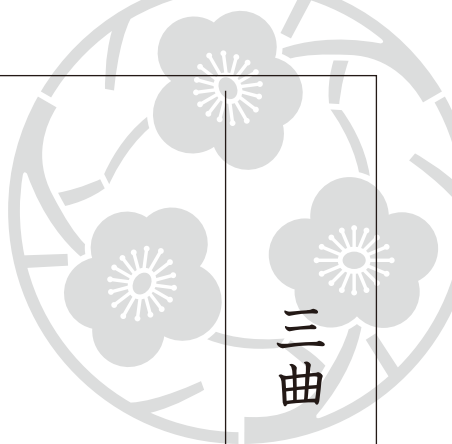
京鹿子娘道成寺 35

三曲

箏曲組歌

「初音曲」

(奥組)



箏

山下名緒野

小林名与郁

上村和香能

佐々木千香能

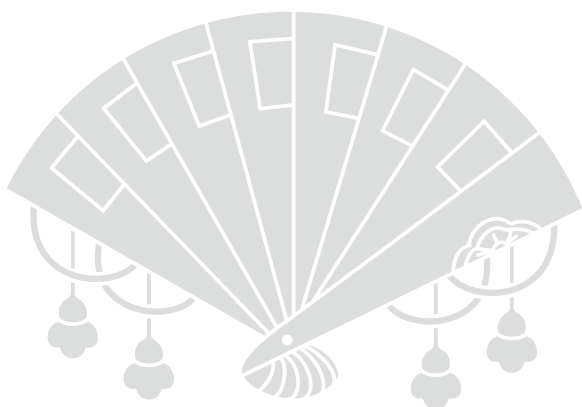
箏

渡辺岡華

杉本禧代賀

山口明代賀

萩岡松柯



解説

箏曲組歌

「初音曲」(奥組)

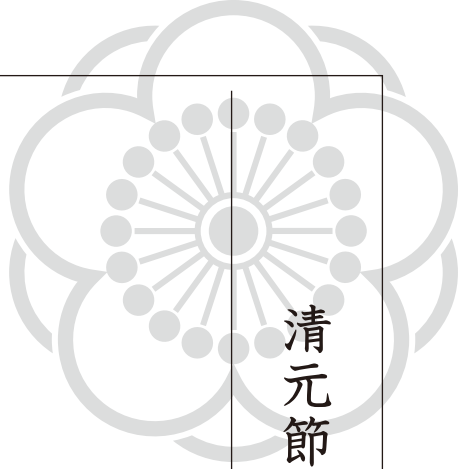
山田検校(一七五七〜一八一七)が作曲した唯一の組歌です。

「源氏物語」を題材にした組歌は数多く有りますが、「初音曲」は六歌全体を、三十六歳の光源氏が新築の六条院で迎えた正月の物語である「初音の巻」で統一していることに特徴があります。また組歌の定型に倣い、各歌一二八拍に統一されていますが、曲の進行に連れ緩急があり、他の六歌構成のものより演奏時間が短いことにも、山田検校の工夫をうかがうことができます。

一歌は、梅が香り御簾内の薫き物が匂う「春の御殿」をたえています。二歌は、光源氏と紫の上が鏡の様な池に映る自分たちの姿を見ながら、末永い契りを祈ります。三歌では千歳の春を祝い、小松を引いて遊ぶ人々の姿が見られます。四歌では姫君を鶯、明石の御方を松の根に例え、母娘で歌を交わします。五歌は翌二日の夕暮、管弦の宴で「此の殿」を歌い楽しみます。六歌は男踏歌の一行が、六条院に廻り唱えた「万春楽」に掛け「万歳楽」という囃子詞で結びます。

詞章

- 一. 梅が香も御簾の匂ひに、吹きまがひ春の御殿に、春立てる御前のさま、言ふ言の葉も及ばじ。
- 二. 近江のや近江のや、名高き山もよそならぬ、春の鏡に向かひみて、変はらぬ影を映さん。
- 三. 今日の子の日なりけり、千歳の春を祝ふとて、園生の小松引き遊ぶ、人の心ぞのどけき。
- 四. 珍しや影高き、花をねぐらの鶯、巢立ちし松の根に立てて、谷の古巢を言問ふは。
- 五. 花の香さそふ夕風、のどやかに吹きたるに、梅もやうやうひもときて、此の殿遊ぶぞ面白き。
- 六. 男踏歌の明け方、水駅にもあらじな、綿をかづき渡して、万歳楽を歌へり。



清元節

梅の春

浄瑠璃

清元 志寿子太夫

清元 志寿雄太夫

清元 一太夫

清元 成美太夫

三味線

清元 栄吉

清元 雄二郎

上調子

清元 美一郎



清元 志寿子太夫（きよもと しずこだゆう）

昭和二十八年生まれ。三六年今藤綾子に長唄を習う。四十八年、父栄三郎に入門し、祖父清元志寿太夫にも師事。同年清元志寿子太夫を名乗り、帝国劇場「三千歳」で初舞台。五十一年東京芸術大学音楽学部卒。平成八年清栄会奨励賞受賞。十六年より東京芸術大学非常勤講師。荻江露秀、都志中としても活動。「邦楽百科事典」等、本名柿澤秀一の名で執筆する。清元協会理事。



清元 栄吉（きよもと えいきち）

一九六三年生まれ。東京芸術大学音楽学部作曲科を卒業後、清元栄三郎師に入門。平成元年、七世宗家より清元栄吉の名を許され以後清元節三味線方として歌舞伎、日本舞踊公演等に出演。幅広い分野で創作も多く手がける。創邦21同人。現代邦楽作曲家連盟会員。清元宗家高輪会理事。第十七回財団法人清栄会奨励賞。第三十三回松尾芸能賞邦楽新人賞。第十六回日本伝統文化振興財団賞。



解説

梅の春

清元の演奏に必要な殆どの奏法が織り込まれていると言われる本曲は、基礎的で、素朴な中に豊かに息づく町の賑わいや華やかさ、めでたさなどが凝縮され、清元の本質的な魅力を物語っているようにも感じられる作品です。

文政十（一八二七）年春、晴れて狂歌の判者に選ばれた、作詞者の毛利元義（四方真門）は、まず詞の中でその喜びを つつましく述べます。

「四方に」「ゆるしの」「心ばかりは春霞」などは、それらにゆかりの深い言葉として綴られています。へ雪の梅の門からは、毛利の領地である長州の風情や行事が描かれます。「誘い出し」の手に導かれ、へ春景色から、舞台は江戸へと移ってゆきます。隅田川、その遠景、文化の中心地である吉原、晴れやかな正月の行事、大神楽と、賑々しく祝賀気分を高め、喜びを現します。最後は謡曲「高砂」の切りである、「千秋楽」の一部を取り入れ、華やかながらも厳かに幕切れとなります。



詞章

へ四方にめぐる 扇巴や文車の ゆるしの色も昨日今日 心ばかりは春霞 へ引くも恥かし爪じるし 雪の梅の門ほんのりと へ匂ふ朝日は赤間なる 硯のうみの青畳 もじがせき書かき初に 筆ぐさ生ふる浪間より 若布刈るてふ へ春景色 浮いて鷗の一イニウ三イ四ウ へいつか東へ筑波根のかのもこのもを 都鳥いざ言問はん 恵方さへ へよろづ吉原山谷掘 宝船こぐ初買によい初夢を三ツ布団 弁天さんと添ひぶしの へ花の錦のかざり夜具はたちばかりも積み重ね へ蓬来山と祝ふなる 富士を背中にかがため 塩尻ながく居すわれば ほんに田舎も真柴焚く へ橋場今戸の朝煙り つゞくかまども賑はふて へ太々神楽 門礼者梅が笠木も三囲りの土手にさへずる鳥追ひは三筋霞の連れびきや へ君に逢ふ夜はたれ白髭の森越えて 待乳の山と庵崎の その鐘が測かねごとくも楽しい 仲ぢやないかいな 面白や 千秋楽は民をなで 万歳楽には命を延ぶ首尾の松が枝竹町の 渡し守る身も時を得て 目出度くこゝに 隅田川 つきせぬ流れ清元と 栄え寿く梅が風 幾代の春や匂ふらん 幾代の春や匂ふらん

浄瑠璃

鶴賀 七代 寿

三味線

鶴賀 七代 丸

上調子

鶴賀 七代 寿郎

上調子

鶴賀 七代 三郎



鶴賀 七代 寿 (つるがきよじゆ)

如月派家元。新内協合理事。鶴賀七代太夫に師事。本名粟屋敏江。神奈川県鎌倉市出身。一九三七年生まれ。六歳より日本舞踊を始める。藤間流、師範藤間勘寿与。一九七二年鶴賀七代寿の名を許される。一九八五年如月派二代目家元を継承。「第一回鶴賀七代寿の会」(七十七年三越劇場)開催、以後通算三十六回開催。「新内如月派二代目家元襲名披露会」(八十七年歌舞伎座)開催。歌舞伎座本興行として、八十九年「明烏夢泡雪」、二〇〇一年「若木仇名草」出語り出演。松竹会長賞(八十九年)、文化庁芸術祭賞(九十二年)、松尾芸能賞(九十八年)などを受賞。日本コロムビアより『応挙の幽霊』『梅川忠兵衛』『緋行燈』『広重八景』などを発売。現在、若手育成に力を注ぐ。



鶴賀 七代 三郎 (つるがきよじゆろう)

今村昌平の横浜放送映画専門学院演劇科第一期生。昭和五十三年に鶴賀七代寿に入門、五十四年に名取。新内節三味線のほか、新劇関係の作曲・演奏でも活躍。母校の講師も勤めている。

解説

あけがらすゆめのあわゆき
明烏夢泡雪―部屋

この曲は、明和六年七月三日、江戸三河島近くの田圃で、浅草蔵前の伊勢屋の養子・伊之助が、吉原の遊女・三芳野と情死した事件を浄瑠璃にしたものです。作者は、初代鶴賀若狭掾である。この浄瑠璃が初めて上演されたのは、弘化四年、大阪大西の芝居で、出語りは鶴賀馬蝶であり、大阪中の大評判でした。江戸では、八代目團十郎が時次郎、坂東しうかが浦里でつとめたのが最初でした。

物語は、春日屋時次郎は山名屋の浦里と深く馴染み、みどりという子供までもうけたが、金を使い果たして工面が出来なくなつたため、山名屋からは急かされ、浦里にも逢えずにいました。時次郎は密かに首尾をして浦里の部屋に忍び込み、心中しようと語りあいます。そこを遣手のお萱に見付けられ、時次郎は、楼の外に叩き出される、という筋が上の「部屋の段」です。このあと、下は「雪責めの段」となります。

詞章

へ春雨の眠ればそよと起されて 乱れそめにし浦里は
浦「ノウ時次郎さんこのようにせきせかれさぞ気詰まりに
ござんしょうそれを堪えて下さんすも 私可愛いと思うて
のお志 嬉しうござんすかたじけない ト
へ抱きしむれば

へイヤ俺ゆえと引きしめて 物をも言わず締め合いて
後は涙にくれけるが
へ男涙をはらりと流し

時「いつまでこうして居たとても 限りもなき二人が仲長居
する程そなたの身詰まり 此の程段々話す通り 国の親仁
の江戸表 地頭の方へいだす金 二百両はさておいてその
ほか一門出入り屋敷 騙りつくして此の有様

へそなたも共にと云いたいが愛しそなたを手にかけて
時「どうなるものぞ ながらえてわが亡きあとで一遍の回
向を頼むさらば

浦「あもし

へあんまり酷い情なや 今宵はなれてこなさんの死のうと

覚悟さんした身を 如何な気強い女子じゃとて どうして放しやりようぞかねて二人が取り交わす起請誓紙はみんな仇どうで死なんす覚悟なら 三途の川もコレこのように二人手を取り諸共と 何故に云うては下さんせぬわしややりはせぬ放しはせぬ 殺しておいてゆかんせと 男の膝に取りついて 身を震わして泣きいたる

へ遣り手のかやが声として

かや「この子供は灯を見ると眠るかへと 声はしたなく罵って

かや「浦里さん浦里さん ちヨトお目にかかりましょうへと呼び立つれば

へ浦里ハツと思えど 素知らぬ顔して

浦「おかやどん 何の用でござんすへといえは へかやが ツコド声

かや「イヤ他の用でもござんせぬが アノお前の客衆は 聞けば昨夜から居続けにござんすげな 若衆に問うてもどの客衆やら知らぬと云う 今の口舌の台詞も時次郎さんに極まった旦那が呼ばんす サアござんせト

へ浦里が手を取って引き立つる

へ隣座敷に亭主待ちかね たぶさを掴んでくるくと手にからみ

亭主「どうで口じゃあ聞かぬ奴 ト

へ罪も報いも後の世も 白髪頭のこめかみも張り切るばかりのやら腹立ち 引立ててこそ降りにける

へあとに大勢 男ども

「あの客ゆえにあの様に憂き目にあわしやる浦里さん

「殊にかかりも余程あり それへ隠れて二階へ上がり 居続けなどとは太い奴

「引きづり下ろして踏みめせ ト

へ恋路の闇の暗がりを 無二無三に引きいだし 踏むやらぶつやらむしるやら叩きすえられ是非もなくなく 箱梯子ようよう伝い降りけるを すぐに表へ突きいだし 門の戸ハタと差し固め 錠さす 音ぞ厳しけれ

小唄 花筏／花の雲他

(舞台面・①〜⑧演奏順)

①花筏

⑧春風がそよそよと

替 蓼房まさ香

蓼胡満佳乃

蓼史ま由

糸 蓼鈴緒

④めぐる日

糸 蓼胡文雄

⑤浮気鶯

唄 蓼胡茂

⑥止めては見たが

糸 蓼胡満千加

⑦春霞浮世

唄 蓼胡満佳

唄 蓼時あや

②花の雲

糸 蓼胡宏

③手枕や

唄 蓼胡可朋

蓼まさ八重

【舞台後方】

【舞台前方】



蓼胡満佳（たでこまか）
 公益社団法人日本小唄連盟副会長。小唄蓼派会会長。
 昭和三十三年、蓼胡満喜に師事、昭和三十八年、初代
 清元寿美太夫に師事。



蓼胡茂（たでこしげ）
 公益社団法人日本小唄連盟常任理事。小唄蓼派副会
 長。昭和五十九年二代目蓼胡茂継承。他に宮園千よし
 恵、東明齋舟、荻江しげる、清元延美光の名を持つ。
 平成二十二年重要無形文化財宮園節保持者認定。



蓼胡可朋（たでこかも）
 公益社団法人日本小唄連盟正会員。小唄蓼派会常任理
 事。昭和三十一年、蓼胡可祢に師事、昭和四十年、清
 元若寿太夫に師事。



花筏

小唄連盟のご祝儀曲。

花の雲

「花の雲 鐘は上野か浅草か」芭蕉の句。助六は男の中の男
 一匹大門へ顔を出すと仲の町の両側から煙草（きせる）が雨が
 降るようにあつたと言う。

手枕や

向島土手の水門あたりに船を舫って夕陽にてらされる梅をぼ
 んやりと眺めているといった、誠に呑気な時代を唄ったもの。

めぐる日

春近く老梅も若やいで梅のつぼみもふくらんできたのを待
 ちわびた若い鶯が、まわらぬ節で朝早く鳴きかける春の朝寝
 を起こされ（さりとは気短かな）と言うところ、ほうほけきよ
 うとい人（ほう法華経）をかけた言葉。

浮気鶯

浮気男をうぐいすにたとえて唄ったもの。

止めては見たが

歌詞は見た通りの甘い詞である。小唄は清元栄次郎の薫陶
 をうけた新橋つる子（清元延はる寿）によって開曲された。「春
 は昔の春ならぬ…《まあ静かな晩だこと》」は、この頃の小唄
 界の流行語となるほど流行した。

春霞浮世

霞のただよう中を旅する人の心を江戸ぶりのあくぬけた
 調子で唄いあげる。

春風がそよそよと

「春風が」は福は内鬼は外と節分の豆まきをした翌日の立春
 の日で梅の香にも春らしいなまめかしさが溢れている。「山谷
 の小舟」という一連の江戸小唄です。立春の頃とて春は名
 みで「ままよそうなりや一晚居続けときめこもう」と心に決
 めたら日本堤を走り出すといった風景を唄ったものである。



花筏（小唄連盟若樹賞受賞者の演奏）

新しく結ぶつどいの花筏
 固きちぎりに三味線の音も冴え渡る
 日本晴れ変わるまいぞの約束は
 千代田の松の千代かけて長く栄えん唄の道づれ

花の雲

花の雲 鐘は上野か浅草か
 ゆかりの色のはちまきは
 江戸紫の伊達姿 堤八丁衣紋坂
 大門くぐる助六に きせるの雨がふるように

手枕や

たまくらや 土手をながめの舟の内
 意気な姿の二人連れ 様子がいいではないかいな
 ほんにのんきな夕桜

めぐる日

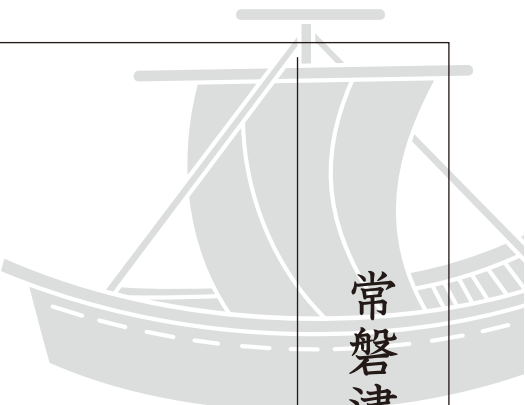
めぐる日の 春に近いとて 老木の梅も若やいで候
しおらしやしおらしや 香りゆかしと待ちわびかねて
笹鳴きかける鶯の 来ては朝寝を起こしける
さりとは気短かな いま帯しめてゆくわいな
ほうほけきょうとい人さんじゃ

浮気鶯

浮気鶯 一、二、三 まだ住みなれぬ庭伝い
梅をば捨ててこませもの ほうほけきょうの約束も
憎や隣りの桃の木に

止めては見たが

止めては見たが 利かぬ気の 帰りたいなら帰りゃんせ
空も朧に薄曇り 春や昔の春ならぬ 月もないのに花の影
移るその香にうっとり まあ静かな晩だこと



常磐津節

乗合船のりあいぶね

浄瑠璃

常磐津 駒太夫
常磐津 光勢太夫
常磐津 勢寿太夫
常磐津 千寿太夫
常磐津 文字蔵
三味線
常磐津 齋蔵
上調子
岸澤 満佐志

春霞浮世

春霞浮世は瓢箪さくらかな ままよ三度笠味なもの
ぶらりぶらりと旅ごろも

春風がそよそよと

春風がそよそよと 福は内へとこの宿へ
鬼は外へと梅が香そゆる
雨か雪か ままよままよ

今夜も明日の晩も居続けに 玉子酒

逢いたさに来てみれば 居ながら酔うて寝てしま

あとは泣いたり笑うてもみたり

ぐちを並べて ままよままよ

今夜も明日の晩も居続けに 茶わん酒



常磐津 駒太夫 (ときわづ こまたゆう)

昭和十三年、大阪生まれ。昭和二十九年、五世常磐津駒太夫に入門。昭和三十四年、千東勢太夫に入門。昭和四十四年、松竹訪米グラウンド歌舞伎で千東勢太夫のワキ語りをつとめる。昭和五十三年、日本橋倶楽部「千登世会」師匠。昭和五十七年、歌舞伎座「角兵衛」初の歌舞伎のタテ語りをつとめる。平成五年八月、勢寿太夫改め六代目常磐津駒太夫襲名。平成十二年六月、重要無形文化財常磐津節総合認定保持者。平成二十四年四月、旭日双光章。常磐津協会理事。



常磐津 文字蔵 (ときわづ もじぞう)

昭和二十七年、東京生まれ。昭和四十六年、東京芸術大学音楽学部に入學(翌年中退)、音楽学を小泉文夫に師事。一中節を十一世都一中に師事し、平成三年十二世都一中を襲名、宗家継承。常磐津三味線方、常磐津文字蔵。



解説

乗合船のりあいぶね

作詞は三世桜田治助、作曲は五世岸沢式佐。
 天保十四年（一八四三）江戸市村座での正月狂言。
 「魁香樹いせ物語ものごと」の大切として上演された曲で、常磐津・富本・長唄・義太夫の四段返しの変化舞踊の一つでした。後に此の曲が独立して「乗合船恵方万歳」として盛んに上演されています。初春、隅田川の渡し場に来合わせた万歳の太夫・才蔵・大工・白酒売り・芸者・通人・女船頭の七人が登場。江戸末期の下町、春らしい気分の溢れる常磐津の代表曲の一つです。
 今日には時間の都合で、万歳の部分を割愛して演奏します。舞台面は縁起の良い、七福神の宝船にも見立てられています。

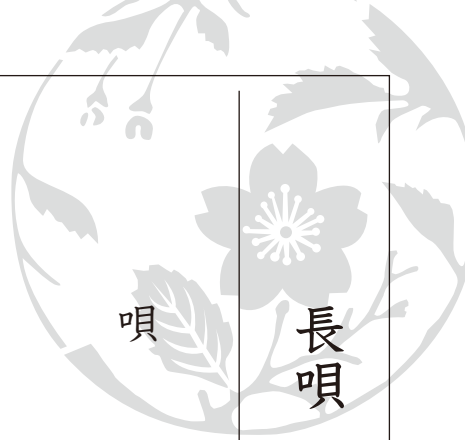


詞章

へ五色彩る宝船 よい乗合と座わせられても 乗り遅れたは訝うしな へ色にや賢い それ様なれど 何じよさっしやれた エイエ エエ恋知らず へイイヤ悔やむな そこへ氣の付かぬ へへ太夫じゃなっけれど いずれも様へ改めて 御祝儀申し 入りのある へ芝居をちよつと立ち見して ツイ遅なわるご無礼と 足を早めて来たりける
 大工「まず初春の事だから白酒屋さん お前めえ先イ やっつけねえ 白酒売「へ 左様ならばお望みに任せ そもく白酒の始まりは へ富士の白雪や朝日で解ける へ解けたがどうしたエ へ娘島田はサ 口舌の半ばでサ寝て解ける へヤレヨイく へ良い評判で売り掛ける
 へそも番匠の始まりは 叩き大工の此方等こつとらが 聞いても上の空仕事 嘘つきのみを突鑿さしがね 差曲尺さしがねを 使い馴れたる友達と へ直に裏釘返して後は ほんに辛み気な溝みぞ鉋かん 憎や節木の性悪と 才蔵「サアくこれから宗匠先生 玉句を承りとうござる 大工「サアその発句とやらぼつくとやら早く聞きてえね サアく早く くく 通人「アアそな宜いソ諸事

風雅の狂道は 士農工商の生業迄も 穿たねばならぬて エエ凝っては思案に能わずと申せば 各々方 マア騒がせ給うなく エエこうつと春風 エエ春風や へ春風や 黒い羽織に小脇差を 差いてゆらりくと船場へ下りやる 通人「ウウイ ヤ甚だ酩酊 エエ時に景色は未明の事に限り やすね 白昼は埃まんくとして野暮者たつぷ コレ恐るべでげす 乞願わくば船衆 急ぐべだよ へこちらも急ぐ送り船 オヤ程なく着岸 「サア一つ聞こし召せ へ所を重ねて香りツンく花に風 軽く来て吹け酒の泡 フッフフ ハハハ フフ ハハ ウハハハハ ハハハ 笑い昂じて腹立てて エイエ筋をゆうべや ウウイ泣き上戸 芸者「サアく三河の太夫さん これからお前の番じゃく 太夫「これは又迷惑な 才蔵仕方がないわ まず初春の事じゃから おめでどう寿を さらばお祝い申そうと へ鼓おっ取り 声繕い へアアヤンリヤ めでたやナア 鶴は千年の名鳥なり へヤ亀は万年のヨ ご寿命 保つ へ鶴にも優れ へ亀にも増す へヤ今日この お家をば 長者の芯とヨ へエエ祝い栄えまします へア一本の柱が一の宮ヨ へアソレ二本の柱が二制咤せんだ迦 へハオヤ三本の柱が 神の明神 へアヤレ四本の柱が しろくや天王 へ五本の

柱が牛頭天王 へ千本余りの柱をンばヤ おっ取り立て喜ばれたり へ誠にめでどう 候いけるとは これからそろく万歳 へオヤ万歳 へへへ万歳 へオヤ万歳 へへへ万歳 へ万歳 くく それ万歳樂で おん喜びだ ハハハハハハハ へ三度な へオヤ三度な へコレ三度鶴が舞にて オヤあだな舞に候わず へハ昔またハハ後白河の法皇様の御時にコレワイ へ熊野山へ御参内の折からコレワイ へ諸太夫の装束で 左折りの烏帽子にてコレワイ へその時京都まで上りては ソレ大内様の御門かやコレワイ へお江戸サアへ下りては これ將軍様の御門かやコレワイ へ旦那さんの御門と三幅は一对にてコレワイ へ元日に潔く開かアヤレ きりやきりりやきりり ソレそこらの姉様の 頬の回りや お鼻の回りが へへ へへ へへへへ べつちやらこ へオヤまっちらこ へべつちやらこ へオヤまっちらこ へオヤまっちらこ へホホヤレくまっちらこに まんざらこ まんざら野暮では オヤどうした才蔵 ありやせまい へ代々栄えて 御方の長者よ アなお万歳樂まで も やら へへ おめでどう へ共に嬉しき乗合に 声春雨と鳴り響く 初雷に人々は 我が家をさして急ぎ行く



長唄

京鹿子娘道成寺

きょうがのこむすめどうじょうじ

唄

三味線

- 芳村伊十郎
- 芳村金四郎
- 芳村辰三郎
- 杵屋喜三助
- 杵屋勝英治
- 杵屋勘五郎
- 松永忠一郎
- 杵屋廣吉
- 杵屋直光
- 松永忠三郎
- 福原徹彦
- 望月太左幹
- 望月秀幸
- 梅屋右近
- 梅屋福太郎
- 梅屋喜三郎
- 梅屋福三郎

- 笛
- 小鼓
- 小鼓
- 小鼓
- 大鼓
- 太鼓



八世芳村伊十郎 (よしむらいじゅろう)
 長唄演奏家(唄方)。昭和十九年、浜松市生れ。昭和三十八年、芳村伊十富より手ほどきを受け、昭和四十一年一月、芳村伊知郎の名で歌舞伎座初出勤。昭和四十五年九月、五代芳村金五郎を襲名、昭和五十四年五月、十一代芳村伊三郎を襲名し、家元を継承。昭和六十三年一月、芳村伊三郎のまま八代芳村伊十郎を襲名。平成二十九年五月、一般社団法人長唄協会会長就任。



七世杵屋勘五郎 (きねやかんごろう)
 長唄演奏家(三味線方)。昭和三十年生まれ。昭和四十三年、十三歳で五世勘五郎の幼名「廣吉」を継ぎ演奏活動を開始。平成九年、長唄宗家派家元七世杵屋勘五郎を襲名。「長唄矢乃音会」を主催し門弟の指導にあたる。国立劇場養成課講師を常任、NHK文化センター、産経学園の講師として生徒を指導。昭和六十三年度、平成元年度、平成四年度文化庁芸術祭賞受賞。



四世梅屋福太郎 (うめやかんごろう)
 邦楽囃子方 梅屋流代表。昭和二十四年生まれ。十二歳より父三世梅屋福太郎に師事。昭和五十六年十二月、四世梅屋福太郎を名乗る。昭和六十二年十一月、国立小劇場にて初世二世三世福太郎追善四世福太郎襲名の会を主催する。平成二年より梅屋福太郎独創会を主催し現在に至る。一般社団法人長唄協会理事。

詞章

へ花のほかには松ばかり 花のほかには松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん 三下りへ鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘を撞く時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘を撞く時は 是生滅法と響くなり 晨鐘の響は生滅々己 入相は寂滅為樂と響くなり 聞いて驚く人もなし 我も五障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん 二よりへ言わず語らぬ我が心 乱れし髪を乱る、も つれないは唯移り気な どうでも男は悪性者
 へ桜々と謡われて 言うて袂のわけ二つ 勤めさえ唯浮々と どうでも女子は悪性もの へ都育ちは蓮葉なものじゃえ
 へ恋の分里 武士も道具を伏編笠で 張と意気地の吉原 花の都は歌でやわらく敷鳥原に 勤めする身は誰と伏見の墨染 煩惱菩提の撞木町より 難波四筋に通い木辻に 禿だちから室の早咲き それがほんに色じゃ 一イニウ三イ四ウ 夜露雪の日 下の関路も 共にこの身を馴染重ねて仲は丸山ただ円かれと 思い染めたが縁じゃえ 三下りへ梅とさんさん桜

解説

京鹿子娘道成寺

きょうがのこむすめどうじょうじ

宝暦三年(一七五三)三月、江戸中村座初演。初世杵屋弥三郎作曲。いまさらいうまでもない長唄の代表的名作で、解説を必要としない曲です。長唄の初期の作品でありながら、これだけ愛好されているのは、舞踊としての振付もよくできている、また、曲のあらゆる部分にわたって先人の工夫が加えられ、ほとんど洗練の極致にあるからです。

構成は基本的には十三段からなる組歌形式で、一つひとつの歌が、それぞれ女性の生き方を表現しているものと解釈され、返し唄の手法も十分に發揮されて、はなやかな雰囲気にも満ちています。唄も三味線も鳴物もきかせどころばかりといってよく、道成寺ものといわれるジャンルの集大成曲といえます。「鞠唄」の部分の廓尽し、当時の流行歌といわれる「わきて節」、「恋の手習い」のクドキ、山尽しなど、それぞれ独立性の強い段を次々に並べて、変化に富んだ、それでいて見ても聞いても楽しい曲に仕上げられています。題材は謡曲の「道成寺」からとったものですが、そこに歌舞伎所作事の「見せる」特色を生かすべく、物語本来の筋を離れた自由な展開がなされています。

は 何れ兄やら弟やら わきて言われぬな花の色え へ菖蒲
 杜若は何れ姉やら妹とやら わきていわれぬな 花の色へ
 へ西も東もみんな見にきた花の顔 さよえ見れば恋いぞ増す
 え さよえ可愛ゆらしさの花娘 へ恋の手習いつい見習いて
 誰に見しよとて 紅鉄漿つけよぞ みんな主への心中立て
 お、嬉し お、嬉し へ末はこうじゃにな そうなる迄は
 とんと云わずにすまそぞえと 誓紙さえいつわりか 嘘か誠
 か どうもならぬ程逢いに未だ へふつつり恪気せまいぞと
 たしなんで見ても情けなや 女子には何がなる 殿御く
 の気が知れぬ 気が知れぬ 悪性なく気がしれぬ恨みく
 てかこち泣き露を含みし桜花 さわらば落ちん風情なり
 へ去る程にく 寺々の鐘 月落ち鶏鳴いて霜雪天に 満ち
 潮程なくこの山寺の 江村の漁火愁いに対して人々眠れば
 好きひまぞと 立ち舞うように狙い寄って撞かんとせしが
 思えばこの鐘うらめしやとて 龍頭に手をかけ 飛ぶよと見
 えしが 引きかづいてぞ失せにける

本日のナビゲーター
 葛西聖司 (かさい せいじ)



古典芸能解説者。伝統文化や古典芸能に関する豊富な知識、経験を生かして歌舞伎などの古典芸能の解説、講演や大学等の講師として活躍すると共に、シンポジウムなどのコーディネーターとしても幅広い活動を行っている。

主な著書

- 『僕らの歌舞伎』(淡交社)
- 『名セリフのカ』(展望社)
- 『ことばの切っ先』(展望社)
- 『文楽のツボ』(日本放送出版協会)
- 『能楽入門2 能の匠たち』(共著、小学館)
- 『能狂言なんでも質問箱』(共著、檜書店)
- 『歌謡曲のカーアウンサーふたりロザミ語る』(共著、展望社)

本プログラムの詞章は実際に演奏される部分のみの掲載となっております。
 全曲分の歌詞をお知りになりたい方は、それぞれの協会までお問い合わせ下さい。

邦楽実演家団体連絡会議 (事務局 長唄協会内)

一般社団法人 義太夫協会	事務局	電話 03-6265-1880	http://www.gidayu.or.jp
清元協会	事務連絡所	電話 03-3739-6765	http://www.kiyomoto.org/
一般財団法人 古曲会		電話 03-3431-3336	
新内協会		電話 03-3260-1804	
常磐津協会	事務局	電話 03-3636-2220	http://www.tokiwazu.jp/
一般社団法人 長唄協会	事務局	電話 03-6279-4749	http://www.nagauta.or.jp/
公益社団法人 日本三曲協会	事務局	電話 03-3585-9916	http://www.sankyoku.jp/
日本琵琶楽協会		電話 03-5371-0120	https://nihonbiwagakukyokai.jimdo.com/
特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会		電話 0467-51-9798	https://sites.google.com/site/chikuzenbiwanpo/
公益社団法人 日本小唄連盟		電話 03-5641-0830	http://www.kouta-renmei.org/
一般社団法人 大阪三曲協会		電話 06-6647-7150	http://3kyoku.com/
一般社団法人 関西常磐津協会		電話 06-6214-0753	http://www.kansai-tokiwazu.com/
公益社団法人 当道音楽会		電話 06-6768-1913	http://todo-ongakukai.jp/
名古屋邦楽協会		電話 052-229-8980	https://sites.google.com/site/hougakunagoya/

次回の邦楽演奏会は2020年3月29日(日)を予定いたしております。

